

草庵仏教

第198号
(発行日)
2006年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答(二十九) 欲生我国の心

K 「阿弥陀仏の本願は一切衆生を救済しようという誓いであり願いであるといわれ、その本願は仏説無量寿経に説かれている四十八通りの願のなかの第十八願にかなめが表されているといわれます。それで第十八願の(至心・信樂・欲生我国)という願文の中、至心信樂のお心は先月お聞きしましたが、次の欲生我国についてお話し下さい。まず欲生我国とはどういう意味ですか」

D 「なぜなら、南無阿弥陀仏は一人一人の衆生を浄土に生まれさせようとの誓約であり、それを実現してくださるお力が完成されているからです」
K 「なぜそういう功德が南無阿弥陀仏にはあるのですか」
D 「それは阿弥陀仏が法蔵菩薩にまでなられて一切衆生を仏にするための長いご修行をされたからです。一人一人を仏にするために菩薩の行を長い間修められ、私たちが仏になることのできる仏因を全部仕上げられたからです」
K 「阿弥陀仏が私たちのために仕上げてくださいました仏因がどうして私たちの仏因になるのですか」
D 「仏因を私たちに与えてくださるからです」
K 「どのようなして私たちに与えてくださるのですか」
D 「仏因である南無阿弥陀仏を聞かしてください、信受させてくださることによって私たちが南無阿弥陀仏をいただくことができるのです。私たちは南無阿弥陀仏を聞き、信受する時、南無阿弥陀仏の仏因をいただくことになるのです。仏説無量寿経

にそのことをあらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。心を至し回向したまえり。心と積尊はお説きになつています。南無阿弥陀仏の名号を聞き受ける、それが(信心歓喜する)ことです。そこに阿弥陀仏は名号の仏因を回向し(あたえ)てくださいるのです」

《汝を助ける、浄土に必ず生まれさせる》という阿弥陀仏の仰せです。大いなる慈悲のお心です。聖人はこの心を欲生と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。

K 「南無阿弥陀仏を聞き受けるとはどういうことですか」
D 「(南無阿弥陀仏)と聞いて、この南無阿弥陀仏様が浄土に生まれさせてくださると信受することです。受け取ることです。信受するところに南無阿弥陀仏の功德が私に与えられるのです。すなわち阿弥陀仏は、私どもに心を至して回向してくださいるのです」

K 「その名号を聞く」とは
D 「お念仏を聞くことです」
K 「お念仏を聞くとは」
D 「お称えしているお念仏がナムアミダブツと聞こえてきます。その一声一声が(我が国に生まれさせる)という仰せ、いわば(汝を助ける、浄土に必ず生まれさせる)という阿弥陀仏の仰せです。大いなる慈悲のお心です。聖人はこの心を欲生と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(金) 午後二時始まり

法話・念佛寺住職

るといふ、そういう圧迫、大きなストレスの中に生きています。そして多くの場合、死んだら全とおしまいという、何とも言えぬやりきれなさの中で、死ぬのは仕方がないと思いつつ、せめて死ぬまでは楽しく生きていたいと思つて生きています。そういうのが今日の一般の人々の姿です。そんな中で、(浄土に生まれるとおもえ)というお言葉を聞かせていただくことは本当に有難いことですね」

*

D 「ええ。どうしても死なねばならない。そして死ねばどうなるか、全くの不透明、不可解な中にいやでも死んでいかねばならない。そういうのが私たちの思いであり、考えであつて、それ以上には考えもつかないですね。でも仏様から見られた私たちの姿は『華嚴経』に

三界は虚妄にして、ただ是れ一心の作なり

と説かれているように、私たちが感じていゝるこの世界(三界)は一人一人の心によつてとらえられた虚妄の世界であつて、真実ありのままを知つていゝるわけではない、と説かれているので、あえていゝば、(私が生まれ、私が生き、私が齢を取り、私が病となり、私が死んで、死んでどうなるかわからない)と考へていゝる、その考へがそもそも私たちの想念(心)が作りあげた虚妄なのだといわれるのでしよ

う」

K 「そういうようにずっと続いてきた(私がある)というのは、私を实体化して執着してゐる迷妄(虚妄)の所産であるということですね」

D 「しかし、私たち凡夫はそう思つてしか生きられませんか、そんな私に(かならず助ける、浄土に生まれることが出来るとおもえ)と喚びかけたまうのが南無阿彌陀仏であります」

K 「そうすると、私たちが死んだら困ると思ひ、死んだらどうなるかという未来が不安であり、死ぬのは仕方がないからせめてそれまでは楽しく生きたいなんていゝ自分の(思ひ)の中に閉塞されてゐる私たちに、そういう想念を捨てよと言われずに、(我が名を称えよ)と申され、(必ず浄土に連れて行くから安心してくれよ)と約束し、喚びかけて下さるのが南無阿彌陀仏なので、すね。妄想的な想念ばかりの中に南無阿彌陀仏が与えられ喚びかけて下さるので、すね」

D 「ええ、ですから南無阿彌陀仏は真実からの働きだといゝことを聖人は(浄土真実の行)と申されました。真実ありのままの領域を浄土と教へてくださり、この浄土は清浄安樂な常住の世界であるから、その浄土に阿彌陀仏の願力にて至らしめると、お知らせ下さるので、すね。幻想でも想念でも煩惱でもない、真実そのものである南無阿彌陀仏と、

私たちの煩惱・想念の心に現れて喚びかけてくださるので、すね」

*

D 「そして、さらにいゝば、(我が国に生まれんと欲え)とは、私たちに浄土に生まれようと願ひなさいといゝ、一切衆生への阿彌陀仏の願心を表されてゐるといゝましよう。なぜなら、私たちが願つてゐるのは、この体のいのちを長生きさせることであり、健康にたもつことであり、家族の生活が安定することであり、収入が増えることであり、趣味や道楽を楽しみたいといゝような、目の前のやがてはかなくなる願ひばかりです。そういう我欲なり自分の願望ばかりに生きてゐる私たち。しかし願望は無常變転する人生において、さまざまな縁によつて、生活が苦しくなつたり、病氣になつたり、家族が離ればなれになつたりで、自分の願望通りにはいきませんし、しかも生きたいといゝ根本的な願ひも死なねばならない壁につねにぶつかつていゝます。そういう苦惱や不安をかかえてゐる私たちに、(浄土に生まれようと願ひなさい)とのお勧めは、私たちが永遠に救われたといゝというのちの根源的な願ひを明らかにし、その方向に(すでに道あり、この道に來たれ)

と指し示したもうお言葉なので、すね。この阿彌陀仏の願ひに揺り動かされて、私たちのそれぞれの願ひはいろいろあつても、一番大事な、一番至要な願ひを阿彌陀仏の願ひに應じて(浄土に生まれようと)と願う、それが一切の苦しみから解放されていゝ道になつていくのです」

K 「そうすると、浄土に生まれようと願うことに私の願ひを向けることですね。それが非常に大事なことになるのです」

D 「ええそうです。(往生極樂の道)をたずねることです。そうするとこの世のさまざまな不都合なこと、難儀なこと、嫌なこと、不幸なことが、みな浄土に生まれていく道への大事な縁になつてくださるので、すね」

K 「すると(我が国に生まれんと欲え)といゝお言葉の広い意味では、一切衆生に、浄土に生まれようと願えとのお勧めの大悲のお心といただけるので、すね」

*

D 「ええそうです。そしてさらにいゝば、阿彌陀仏が私たちに安樂浄土に生まれることを願ひよ、生まれさせるから、と仰せ下さるお心は、浄土に生まれたならば、他の衆生を救う広大な功徳をたまわり、惑える苦惱の世界に還つて衆生の悲しみや苦しみに同感し、さまざまは姿になつて衆生を導き、ともに浄土に生まれる身に衆生を育てていゝと、そういう功徳を与え

てくださる。いわば我が身だけのために浄土に生まれるのではなくて、他の衆生を救うため、他の衆生を仏道に入らしめんがため、利他の菩薩となつてさまざまの姿となり、形となり衆生に寄り添つて、衆生を救う働きをする。そのような利他の活動をなさせるために、衆生を浄土に生まれさせようと願ひかけてゐるので、すね。それで(我が国に生まれよ)と仰せ下さるので、すね」

K 「浄土に生まれるのは我が身が清浄な仏になつて安らかな身になるというためだけではないので、すね」

D 「そうなんです。むしろ苦しい衆生を救済する徳を成就するために浄土に私たちが生まれさせようとお心です。この世では私たちは煩惱の身であり、人を救うような徳はなかなか無いのです。それゆゑ周りの人を助けたいと思つても力が及ばず、いかんともしがたいと悲しむほかありません。阿彌陀仏はそういう私たちの能力の限界を知つておられ、私たちが浄土に生まれさせて利他の徳を成就して有縁の衆生を救う働きをさせようと、不可思議の願力をもつて、(我が国に生まれようと欲え、生まれさせよ)と喚びかけて下さるので、すね。このことはまた第二十二願で阿彌陀仏はお誓ひになつてゐます」

(了)

歎異抄 第一章第六講

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々。
(歎異抄第一章より)

(現代語訳)

ですから、本願を信じるならば、念仏以外のどんな善もいりません。念仏よりすぐれた善はないからです。また、どんな悪も恐れることはありません。阿弥陀仏の本願をさまたげるほどの悪はないからです

*

私たちは少し真面目に人生を考え、どう生きたらよいかというとき、「善を求め、悪をおそれる」のであろう。善いことを為し悪いことをしないようにと思う。ただし、善を為し悪を避けようとする時の動機を探ってみると、どうであらうか。

*

たとえば、インドのヒンズー教徒のなかでことに熱心な人の多くは肉食主義者である。なぜかという「肉食はしない。それは殺生の罪につながるから」という。しかし、動物の命を殺すことになるから肉は食べないという動機の中に、肉食をすると罪になり、自らの魂が汚れて、来世に悪い境界に生まれるからという、それで肉食をしないというのを聞いたことがある。生きものの命を殺すと自分が罪を増し、来世がよくないからというのである。

であればその動機は、生きものを殺すことは生きものを苦しめるからという慈

悲の心からでた行為とは純粹にいえない。殺生しないというのは慈悲の心から出たのではなくて自らの来世の幸せを望むためとなる。来世の自分の幸せのために殺生という悪をおそれているのである。

あるいはキリスト教徒の中には、他者に対する愛の行いという場合、愛の行いをする事によって神に認められ天国に自分が生まれさせてもらおうとする。そのために人に親切をするなら、それは苦しんでいる人を見ているのではなくて自分のことを思っているのではないか。パウルには愛の行いとはこのようなものであるというイエスの話が出ている。『ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしていてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とブドウ酒を注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れていって介抱した』とある。

苦しんでいる人を見て『気の毒に思う』慈悲心からの自然な行いこそが愛の行為である。したがって自分が神に受け入れてもらいために言うのは純粹な愛の行為とはいえないであらう。

またこんな話も聞く。「善を為せばやがては自分に良いことが返ってくる。だから善を行いなさい」という。「幸福になりたいたいなら善を行いなさいといわれる」のである。たとえば「夫をいつも責めてばかりいて家庭が荒れたのは夫を責めていた自分が反省が足りなかった。夫に感謝しなければならぬ」と思い、感謝

の生活を始めた。そうすると夫がだんだん私に優しくなり、家庭が幸せになった」という体験談を聞いて「善を為せば幸せになる、悪を為せば不幸になる」と理解し、善を求め悪をおそれる。しかし、善を求め悪をおそれる心の中に、善そのものを欲するというよりは善の結果としての善いを求めて、悪の結果である不幸をおそれて悪をなすまいとするのである。しかし、こうした「善を欲し、悪をおそれる」という心根には、どこまでもその自己関心から「幸福を求め不幸をおそれる」という、いわば自己をあるいは自分の家庭を、自らの善なる行いで護ろうという自己中心的な生き方があるのではなからうか。自分の行う善によって自分を立てようとするのである。

*

だから、こういう生き方はいわゆる「真面目」ではあるが、自分の行いによって不幸がくると思うから、ちっとも油断が出来ないのである。そして何か病気になるったり家庭にごたごたが起ると「自分の行いに悪いところはないか」と不安になる。そしていつでも自分は「正しい生活をしている」と思わなければ安心はできない。自分はいつも善人でなければ、安心して生きられない。しかし、人間は悪を為すことがよくあるものである。そうするとこれではいけないという後悔やら自責の念で苦しむことになる。

ある宗教に関わっていた人がいて、「感謝がなかなかできない」といつも言っていた。なぜなら「周りの人に感謝しなさい。感謝の生活をするとあなたも幸せになれる」と教えられていたからである。そしてその感謝がなかなかできないといつも嘆いていたのである。

「周りの人に感謝してこそ自分は幸福になる」というと、他者に純粹に感謝することよりも、それによって自分が利益(福)を得ることに一番の関心があるのである。一見真面目ではあるがやはり自己中心的になっているのではなからうか。

*

「他の善も要にあらざ、悪をもおそるべからず」という、それは自分を立て、自分を守り、自分の幸せのために「善を求め、悪をおそれる」という立場ではなくて、阿弥陀仏の撰取不捨の利益をいただいて弥陀に支えられて生きる道である。

自らの行い(善行)によって自分を支えようとするのは自力の道である。それはいかにも正当に見える。しかし、自分の行いでは自分の全体は支えられない。行いは部分であり自己存在は全体である。自分の行いで自己存在を立てようとするのは、たとえば手や足で自分の全体を支えようとするようなものである。

どんなすがたであっても、それを支えているのは大地である。大地こそ私の存在を支えるものである。そんな大地のよくなはたらきこそ弥陀の撰取のはたらきである。

阿弥陀仏の本願(念仏)によって、私は支えられているから、自分の行いによって自分を支えようとする。自分自身を支え、護り、幸せをえようとみずから計らうことはしないというのが浄土真宗の信心であるといわれているのである。それで聖人は「それがしは善もほしからず悪もおそれなし」とも仰せられている。

（「仏にあうまで」という題で粗文を長々とつづってきたのであるが、先月号で一応たどたどしい道のりは書き終えたのである。これで終わってもいいのであるが、現在の念仏草庵にいたるまでを少しばかり付け添えたいと思う）

*

三十八才の夏、阿弥陀仏の大悲のひとしづくが我が身に届いてくださった。やと確かな聞法がはじまったのである。それまではまるで真宗が分かっていたいなかっただけである。少しは分かっていたつもりであったが、本当のところ弥陀のお助けがどういふものかまるきりわかっていなかったのである。だから「我をタノメ」と仰せ下さる本願を聞いても、この仰せに困ったのである。有難いではなくて、弥陀をたのめぬ自分に困ったのである。しかるに「弥陀をタノメ」はそのままストレートに「そのままなりで助ける」と、こちらからもちだすものは塵ほどもいらぬ有難いお言葉なのであった。

こうして仏の言葉は不可思議にして真実であるという、仏語の尊いことがようやく少し知れてきて、今までいかに仏語をおろそかにしていたかを痛切に知らされた。そうして「浄土に生まれさせる」という仏の言葉は真実であるという信頼が生まれ、死んだらどうなるかは、私にはまったく分からなくても、仏様が浄土に生まれさせるといふお言葉に間違いはない、死ねば浄土に生まれさせて下さるといふ、まことに幼子の如くにそう思わせていただいているのである。

信心を得たというよりは、「汝を引き受ける、助ける」との仏の仰せ一つがそのつど実感的にまことと有難く感じられる外にはなく、信心を自分の心に確かめる必要もないので、信心を得たということ意識することもないのであった。

こうしてこの年がくれていった。十二月二十七日だったと思うが、突然、木村無相さんからお電話があった。今まで郵便ばかりでどうしたのかと電話に出ると、入院中の病院からの電話であった。しかも無相さんの病室である二階から降りて一階のロビーにある公衆電話からの電話であった。電話のお声は「フーフーハーハー」と、非常に息が苦しそうであった。

それもそのはず、病状は相当に悪く、私のある鹿児島までの長距離電話をかけるため、十円硬貨を沢山集めてそれをもってやっと階段を下り電話をかけてくださったのであった。呼吸が荒く声も出さぬのも大変な中で、真宗念仏の肝要は観經下下品の「もし念ずることあたわずば、まさに無量寿仏を称すべし」の一点にあること。「念ずることあたわず」の中に、一切の自分の考えも思想も思いもすべて無効なことが示され、そういうわれわれに「ただ称えよ」との大悲がかげられて

いること、このところが一番大事だということ、このことをどうしても言っておきたいと思つて電話したとのことであった。それこそ、いのちがけのご教示であった。そしてお電話の最後に「正月四日にあんたが来るまでは死ねない。待っている」といつて電話を切られた。正月三日に、福井県武生市の林病院にお見舞いに行くことを前もって無相さんにお伝えしていたからである。この電話の一週間後の一月六日に無相さんは往生された

のである。この時の電話は最初に妻が受けたのだが、木村無相さんのあの時のあえぐような苦しそうな声は一生忘れられないと今でもいう。明けて昭和五十九年一月三日に武生の病院に無相さんのお見舞いに行った。玄関から近い病室のベッドに無相さんはねておられ、付き添いの家政婦さんがそばに座っていた。無相さんはもう立つことはおろか座することも出来ない状態で横になっておられた。話しかけると「待っていた」といわれ、仏法の話をお聞きして下さった。そして話の途中「今ここはどここの部屋か」と尋ねられた。ご自分がいる部屋がどこなのかを知っておられないのであった。「看護婦さんたちがいる部屋の向かいです」と答えると、「ああそんなに悪いのか」といわれ、「なにも死ぬことが怖いのではない。自分の体の状態がどんなかを知りたかったんだ」と言われた。看護婦室のそばに居るといふことは重篤の病人だからそこに移されているということ、ご自分が今どんな状態か知られたのである。そうして私に「時間ばかりも真宗信心についてお話し下さった。「信心者になろうとする、そんなものは色気や。なれん私に阿弥陀様がはからずも目をかけてくださった。もうそれだけで十分である。称えよと言う仰せがかかっている、それだけでなにもいらん。ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ」と苦しい苦しい息の中、最後の力を振り絞ってお話し下さった。

私は「長いこと教えてくださって有難うございます。教えていただいた道を一筋に歩みます」と涙ながらにお伝えした。ともにお念仏しているところに、無相さんを師と仰ぎ、無相さんの身元保証人になっておられた加茂淳光師がお見舞いに

こられた。無相さんが紙とサインペンを取ってくれと言われ、「生き死にの道はただただナムアマミダ、ただ称えよの仰せばかりぞ」とひどくふるえる手でやと書いてくださり、それを私にくださった。これが絶筆となり最後のご教示となった。次の五日には意識は混濁し危篤状態になられ、一月六日（八十才）に往生された。無相さんにであって十三年間、実に親しくお教え下さって、私のことを非常に案じ続けてくださったのであった。本当に謝りたいご恩をいただいたのである。私にとってはまさに還相回向の菩薩としかいようはない。念仏往生一筋の道を我もいただき人にもお伝えする、これは無相さんの死の床で誓ったのであるから、それから離れないようにと今も憶念している。（続く）

《編集後記》

*今年も終わろうとしている。老年に入ると月日のたつのが早いといわれるが実感である。それと身体が老化がいつそう身に浸みる。ただ浄土が近づいてくる日々であるという、そのことを喜ばしてもらいたいものである。

あちこちにお参りに行っても、この世のことばかりの心配や煩いや安心ばかりが語られるのは寂しい。死してゆく後への無関心と裏腹になつていふように思ふ。



台提灯
(C)SHOGAKUKAN INC.